

「今に残りし心の加計橋」 (広島青森県人会活動)

広島青森県人会 旧友

「ふるさと青森」を離れてもう50年を過ぎました。広島と青森はJR路線で1600キロの距離になります。なかなか帰郷するチャンスを作れない自分を嘆くこともあります。が、むしろ「遠きにありて想うもの」がふるさとで、春には野木和公園のお花見、夏には青森のねぶた祭り、秋には浪館山でのスグリやアケビ採り、冬にはサカンやメンドツ作っての雪遊びを思い出しては季節の移ろいのなかに懐かしさが込み上げて来ます。振り返れば辛く苦しいこともあったのに、ふるさとを離れると、いいことばかりが心を過ぎて行くのはきっと私だけではないでしょう。

昭和35年に母校を卒業して東京近辺で10年を過ごし、自動車のロータリーエンジンに引かれて広島に来て40年になります。広島には青森出身者は少なく、職場でも近所でも長い間”つがる”の風を感じることはありませんでした。

今から6年ほど前に、全国都道府県対抗男子駅伝大会での青森選手の応援に広島平和公園のスタート・ゴール地点の近くに出向きました。すると、ふるさと特産品のテント村があって、「青森県」の看板の下で大声を上げて真っ赤なりんごを売っていました。広島青森県人会の会員諸氏が駅伝の選手応援ばかりではなく”ふるさと応援”にも頑張っていたのでした。即入会することにして、ふるさとを応援する活動のスタートとなりました。

広島青森県人会は第4回大会直前(1998年12月)に誕生し、4年前に私が2代目の会長に就任しました。応援活動を賑わそうと、「県人会ホームページ」を立ち上げ、青森のねぶた衣装を取り寄せ、県人会法被を作り、ふるさと特産品の販売は、りんごの他に、八戸狛守の「ニンク煎餅」の他「アップルパイ」「大間昆布」などを並べて、少しでも”ふるさとの味”を広島の住民に知って貰おうと頑張りました。

そして、ふるさと応援に思い掛けない嬉しい話しが飛び込んできました。それは、広島の県北の町、加計(かけ)町からでした。2007年12月に安芸太田町の佐々木町長が広島に来られて、「ねぶた運行のやり方を教えて欲しい」との依頼がありました。新聞の報道で、青森の木造町のミニねぶたが加計町に送られて来たことは知っていました。今から14年前の1996年に広島国体が開かれたとき、男子バレーボール第二部九人制の大会が加計町で行われ、宿泊施設がなかったので出場選手団は民泊したものでした。青森選手団の三橋監督・天坂マネージャー他26名は、加計町川西地区に民泊することになり、その時の川西地区の皆さんの温情が忘れられず、97年、98年と川西地区の有志の皆さんをねぶた祭りの時期に青森に呼んで、バレーボール選手がそれぞれの出身地、八戸から青森・弘前・五所川原・木造などを案内すると言う交流が続きました。川西地区の皆さんが、ねぶた祭りに大変興味が大いことを知った天坂マネージャーが、青森のねぶた人形を川西地区の皆さんに寄贈することを企画しました。問題はねぶた人形の移送に係わる費用の件でした。青森には、男子バレー選手団と加計町川西地区の交流の資金を支援する体制は無く選手団の個人負担で賄っていました。また川西地区でのねぶた人形の保管や運行の可能性を考えて木造町で平成19年(2007年)の夏に運行されたミニねぶたを、壊さずに保管し、天坂マネージャーの勤める農協から広島へのりんごを運ぶ11トントラックのスペースの一部を借りて広島加計町運びました。この交流を守るための大きな努力に頭が

下がります。

2年前に広島青森県人会の支援で、広島では初めての「ねぶた運行」が行われました。毎年7月に行われる「納涼かけまつり」に、日が落ちて暮れ始めるころに、明かりを灯したねぶたが、加計の宿場町通りを練りだすと、町民の多くの人たちから感動の言葉が漏れ聞こえ、私もふるさと青森に帰ったような気分させられました。私もつい、「らせら～らせら～らせら～らせら～・・・」と昔の若い自分に戻って身体の底から掛け声をかけて跳ね踊り練り歩きました。川西地区の30名余りの踊り子たちは青森バレー選手有志と県人会々員の踊りに合わせて燃えるように踊り歩き、汗を流していました。前日に、この祭りに「ねぶたが運行される」とのニュースがなれ、故郷加計町を離れて広島の街で暮らしている若い世代が帰郷し、祭りへの人出が例年の3倍ぐらい多かったようです。長い歴史のある北国の文化が遠く離れた南の広島の地に新しい文化として素直に受け入れられて多くの町民に感動を呼びこんだ素晴らしい一日でした。

そこには、ふるさとの場所が違っていても”ふるさとを大切に想う心”で通い合うことを知らされた温かい物語が実在したのです。現代では失われがちな、人と人との繋がりを大事にする生き方を素直に、極当たり前に実践できる川西地区の皆さんと青森バレーボール選手団の皆さんの生き方は私たちにとっても、とても勉強になる生き方です。都会風のクールな生き方も新世代には魅力があるかもしれませんが、昔風の人情に守られた村風の生き方に、時の流れを超えた価値が存在すると思います。その視点を見失わずにこれからも歩み続けたいものです。

青森バレーボール選手団は「今に残りし心の加計橋」の言葉を川西地区の皆さんに残して帰りました。遠く離れて暮らす私の思いにも「心の加計橋」は、ふるさと青森に繋がっているのでしょうか。加齢とともにその「掛橋」は益々強度が増すように思われます。オリンピックでのカーリング青森チームの放映を見て必死になって応援してしまいます。逆に、秋葉原事件の母校の後輩の報道に悲しみが一杯になります。嬉しいことにも辛く悲しいことにも、ふるさとに繋がっている心で受け止められることは、私はやはり津軽人であるとの証明なのでしょう。きっと。

加計町でのねぶた運行で生まれた県人会と川西地区の皆さんとの絆は、駅伝大会の応援活動に大きな変化をもたらしました。毎年1月に、京都での女子駅伝の一週間後に行われる男子駅伝には去年から川西地区の皆さんが20名前後が応援に参加して下さい、これまでにない賑やかな応援をできるようになりました。その成果が今年の第15回大会に現れました。12回大会までは、いつも沖縄県チームと最下位47位を争ってきましたが、今第15回大会では第32位と大いに飛躍ゴールしてくれました。高校生のMVP選手に、17人抜きの山田高校の田村優宝選手が選ばれ、大きな感動を戴きました。一週間前には京都で福士加代子が15人抜きでMVP賞を貰いましたので今年のふるさと青森の頑張りに多いに元気を戴きました。青森選手団を引き連れて来られた福士加代子を育てた安田先生（青森陸上競技協会理事長）もとてもご機嫌でした。大会後の慰労会では会員が、津軽民謡を唄い、それに合わせて多くの会員が会場を輪になって踊り周り凱旋の気分一杯になりました。

川西地区では「ねぶた会」を創設し、ミニねぶた「縄文幻想」を定期的に補修し大切に守り続けています。そして、選手団から贈られた「今に残りし心の加計橋」の横断幕も催し物の度に掲げて人情の通い合う美しさを多くの人に訴えています。私には”ふるさと”を大切に想う心が繋ぎあって青森男子バレーボール選手団と加計町川西地区の皆さんとの

「心に掛橋」が出来たのだと思います。この掛橋は、10数年間も続き、これからもずっと交流が続くものと思うと羨ましさで一杯です。私たちも、大小に関係なく「心の加計橋」を守り続ける姿勢で歩み続けたいと深く願うものです。

とっちばれ

ふるさとの応援は駅伝大会への応援だけではなさそうです。北国ふるさとの魅力は歴史の分野でも沢山あります。青森に居る時は気付かなかった遺跡が物語るふるさとにあった権力の存在に誇りを覚えます。今から5000年も前に青森市の三内に、当時としては国家と言える大規模な集落が存在したことから始まり、大和朝廷に逆う陸奥の土着民を成敗に赴いた征夷大将軍坂上田村麻呂が敵を油断させておびき寄せるために大蠲螂・笛・太鼓で囃し立てて征服した名残りが今のねぶたとして受け継がれた説に惹かれます。野辺地の南千曳に「都母の碑」と呼ばれた「日本中央の碑」が展示されている。それまでは倭の国と呼ばれていたわが国が「日本」として唐の皇帝に書を呈することとなる歴史の流れに青森に存在した国名が使われたのではと都合のよい説に賛同する。英語で我が国をJapanと呼ぶが、“つがる”を表現するのに時代の変化があって、津藩⇒津判具⇒津加呂⇒津刈⇒東日流と表示された。その中の「津判具」が『東方見聞録』を記述したマルコポーロは「東の海の向こうの黄金国」を中国人から聞いて「Zipangu（ジパング）」と記述しています。（13世紀）元の国の首都・上都では、「津判具」こそ黄金の国として通じていたのではとつい納得してしまいます。